

東アジア共同体の告知者・孫中山と梅屋庄吉

―もつひとつのアジア主義を求めて―

進藤榮一（国際アジア共同体学会代表、筑波大学名誉教授）

（国際会議「清末民初の日中関係―孫文と梅屋庄吉とその時代」

2010年9月3日、北京人民大学にて）

はじめに

8月下旬、フィリピン・マニラで第8回NEAT（Network of East Asian Think tanks）年次総会に出席し、2週間後の北京で辛亥革命百周年記念シンポジウムに参加しながら私は、19世紀末と21世紀初頭の二つの世界を、百年の時空を超えて行き来している錯覚に一瞬襲われていた。

1 結節点としてのマニラ

丁度今から115年前、梅屋は、若い孫文とはじめて香港で会い、中国革命運動に意気投合していた。後年それを梅屋は次のように記す。「中日の親善 東洋の興隆将又人類の平等に就いて全く所見を同じうし、殊に之が実現の道程として、先ず大中華の革命を遂行せんとする先生の雄図と熱誠は、甚だしく我が壮心を感激せしめ一午の誼 遂に固く将来を契ふに至る」（小坂、57頁）

その年10月重慶節に孫文は、革命武装蜂起（広州起義）に出て、梅屋は武器調達に奔走した。しかし蜂起は失敗し孫文は、梅屋の助けで横浜を経由して米国からロンドンに亡命した。その地で若き日の南方熊楠に出会い、熊楠は孫文にこう語っていた。「孫逸仙と・・始めてあいしとき、一生の所期はと問わる。小生答う、願わくはわれわれ東洋人は一度西洋人を挙げてことごとく国境外へと放逐し、たきことなりと。逸仙失色せり」（*1）。

その翌年、フィリピンで反スペイン解放闘争が勃発した。梅屋は、香港亡命中のアギナルドと懇意になり、自らマニラに赴きポンセラ民族独立の志士たちと交流した。そして99年アギナルド再度の武装蜂起に協力加担して梅屋は（亡命先を横浜に移していた）孫文を、ポンセラに紹介した。そして孫文の要請を受けて犬養毅は、フィリピン独立支援のために武器弾薬を布引丸に乗せて送るけれども、船が暴風雨で沈没し、米軍の弾圧下に革命軍は潰走し、以後フィリピンは米国支配下、半世紀にわたる保護国化の道を辿ることになった。冷戦終結後撤去されたクラーク、スービックの米軍基地は、冷戦終結20年後の今日も残る沖縄基地と共に、米国支配の半世紀を象徴していた。

その意味でフィリピンは、百年前に孫文と梅屋、犬養らを結びつけたアジア解放闘争の結節点であり、新しいアジアの秩序創生の出発点でまたあったのである。

それから百年後、そのマニラでNEAT総会が開かれ、新しいアジアの国際秩序たる東アジア共同体が今、設計され構築され始めている。NEATは、2003年北京でASEAN+3（日中韓）の政府外交関係者が設立した、東アジア共同体構築の政策提言機関である。時に、政府間のトラック1外交を下支えるトラック1・5外交と呼称される。その会議が、毎年夏13カ国持ち回りで開催され、アジア新秩序の在り方を議論し、東アジア地域統合を推進しているのである。

孫文と梅屋の時代から百年後の今日、マニラで東アジア共同体設計に参画し、二週間後北京シンポで、清末民初期の孫文と梅屋の、国境を越えたアジア解放の足跡を辿る時、かつて二人が描いたアジアの夢が今ようやくにして現実となり始めているという感興に囚われざるを得なかった。そして改めて問い続けていたのである。いったい孫文と梅屋が描いた夢とは何であり、なぜ挫折したのか。そしてその夢が、辛亥革命を経て幾度もの変遷後の今、なぜ東アジア共同体の形をとって新しいアジアの未来を創り始めているのかと。

2 大東亜解放の夢

孫文が梅屋と共に描いた夢は、次のようなアジア像からなっている。すなわちアジアが、西欧帝国主義から解放され、そのために諸民族が連帯し、そして国々が共生し合うこと。それによって初めて、

アジアの新しい国際秩序を創り上げることができるといふ夢である。東亜の解放と東亜の協働と東亜の共生とからなる、新しいアジアの秩序である。

その時改めて私たちは、孫文と梅屋の思想と行動を、東アジア共同体の構築という地域主義の第三の波の先駆け、もしくはその告知者として位置づけることができるのではなからうか。というのも、東アジア地域統合こそが、東亜の解放を可能にし、東亜の協働と共生を、真の意味で実現できるアジアの新しい国際秩序であるからだ。

実際、孫文と梅屋は一方で、新しいアジアの国際秩序を夢見ながら他方で、その新秩序をつくるために三重の敵と戦い、その支配から解放されなければならないと捉えていた。第一に、三百年間続いた清王朝による異民族支配からの解放。第二に、その清王朝と結び、時に敵対し脅しながら中国を分断支配していた欧米帝国主義支配からの解放。第三に、二千年以上続いた農耕社会に基盤をおく専制主義体制からの解放である。

広州義起に始まり、度重なる武装蜂起と失敗の後の1912年1月中華民国成立——孫文臨時大統領就任——を経て、1924年1月国民党第一次大会での国共合作成立に至る30年間で、3重の敵との戦いと解放闘争とを象徴していた。そのアジア解放闘争の中で孫文は、日本に亡命を繰り返して、闘争を梅屋が支え続けていた。その歴史は同時に、日本のアジア大陸進出と侵攻の歴史——日清戦争

から日露戦争、対支21箇条要求を経てシベリア出兵に至る30年――と重なる。そしてその歴史が、二つのアジア主義――孫文や梅屋らのそれと、犬養や頭山満らのそれと――の違いをあらわにしていたのである。

3 二つのアジア主義

違いは、三層にわたる。第一に、新しいアジアの秩序を、日本を盟主としてつくるのが、広くアジア諸民族との連携と共生の上につくり上げていくのか。第二に、軍事力を軸につくるのか、財や文化を軸につくり上げていくのか。第三に、下からの社会変革の動きを拒斥してつくるのか、包摂しながらつくり上げていくのかの、それぞれの違いだ。つめていえば、日本盟主論による「閉ざされたアジア」なのか、アジア共生論による「開かれたアジア」かの違いだ。その二つの異なったアジア主義とアジア像のはざままで梅屋は、犬養や頭山らの協力を取り付けながらも、孫文らに身をよせ、中国の革命運動に協力し続けた。実際梅屋は、「君兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」という若い日の盟約を生涯守り続けることができた。

なぜ孫文と共に梅屋が、開かれたアジア共生論の思想を共有できたのか。疑いもなくそれは、孫文や、興中会の多くの革命家らと同

じように梅屋もまた、香港、澳門、シンガポール等を軸に東南アジアで生活し、植民地支配の過酷な現実を熟知する共通体験を共にしていたためであつたらう。実際、孫文の日本滞在は7年6カ月、香港滞在8年9カ月、入国を拒否された蘭領地域を除く東南アジア滞在は3年10カ月に及ぶ。その孫文の南洋経験が、(36歳で香港から帰国した)梅屋の半生と重なる。

それに対して、玄洋社や黒竜会に原籍を持つ政論家たちのアジア経験は、白頭山からアムール川(黒竜江)を超え、中国華北からモンゴル、東北地方に至る、相対的にせよ欧米植民地主義の傷浅い、東北アジアを舞台にしていた。しかも清朝打倒に賭けた彼らの政治行動は、孫文らの民族主義に共鳴しながらも、遅れてやって来た新興国日本の対欧米ルサンチマン(復讐感)に根差していた。孫文や梅屋が、広くアジア諸民族の民族主義に対して、開かれたアジア主義を展望できたのに対して、犬養や頭山らが、日本盟主論と国権主義を軸に、閉ざされた大東亜共栄論者へと、転じていく所以といつてよい。

実際、孫文の場合、梅屋と共に、アギナルドやバルカソーラ、シン、ポーヌらの印度解放の志士ばかりでなく、ファンポイチャウ(潘胤珠)らトンキン義塾に依拠したベトナム解放の志士たちと交流し、日本亡命中の朴泳孝ら朝鮮開化党の闘士たちの誠実な支援協力者となることができた。そして、反植民地革命のためにアジア諸民族

が共に連帯し、対等の立場に立つて共生しアジアの興隆をはかるべきだという、アジア協働と共生の夢を共有できた。そこに、中国やインドから、韓国やベトナム、フィリピンなどのフラットで対等な関係を前提に、協働し共生する「開かれたアジア主義」への展望を見ることが出来る。

それに対して犬養や頭山らは、同じようにアジアの解放を説き、李氏朝鮮末期以来、福沢諭吉らとともに李氏朝鮮時代の親日的な改革派、金玉均らの甲申事変に共鳴した。しかしにもかかわらず、日韓併合後の朝鮮独立運動に関与することも協働することもなかった。そして孫文が犬養らに対支21箇条要求破棄への賛同を求めたのに対して、犬養らはそれにけっして応じようとしなかったのである。

しかもその違いは、二つの民族主義像の違いとも重なり合っていた。すなわち、アジア解放の主軸を民族主義(民族自決)におくか、それを超えるかの違いである。民族主義を超えて、民衆の窮状を視座を組み入れ、民生主義的視座を解放の基点に与えるかどうかの違いといつてよい。前者が国権主義に傾斜したのに対して、後者は民権主義に傾斜する。前者がたかだか西欧流民主主義に帰着するのに対して、後者は、民権主義からさらに、農民や労働者の生活の安定と保障を社会構造の基盤におく社会主義的視座——フェビアン流であれマルクス流であれ下からの社会変革論——へ限りなく近接

する。民族主義が国権主義へと変貌する政治観と、同じ民族主義が、民権主義から社会主義へと傾斜する政治観の違いである。

その時、二つのアジア主義の違いは、辛亥革命期にあつても皇帝制の温存をはかる、甲有為らの保皇会系の国権主義か、皇帝制そのものの廃棄を求める民権主義かの違いに分岐する。そしてそれを超え、一方で、1917年ロシア革命を機に登場したソ連邦と連携すべきか否かの選択肢として、他方では1924年に結党する中国共産党との合作連携をはかるべきかどうかの選択肢として浮上する。第一次世界大戦を境に登場した二つの「赤い秩序」——もしくは下からの社会変革の動き——と連携できるか、それを拒斥するかの選択肢である。その二つのアジア主義像の違いが、ロシア革命から五四運動を経てシベリア出兵にいたる、第一次大戦終結をはさんだ東アジア地殻変動のうねりの中で、浮き彫りにされ始めていたのである。

日本のアジア主義の系譜に即していえば、前者、すなわち玄洋社・黒竜会に端を発する頭山や犬養らは、アジアとの連携を重視しながらも、その根底には日本を盟主とし、日中提携を主唱しながらも満州国建国を容認し、大東亜共栄圏の構築につながる。三宅雪嶺や陸喝南、戦時下の京都学派や徳富蘇峰、大川周明、石原莞爾、さらには(戦後期に及ぶ)吉田茂や岸信介、佐藤栄作、安倍晋三らに至る。犬養や頭山らの「脱欧入亜」の大アジア主義が、日本を盟主

とする「閉ざされたアジア主義」に傾斜し、「脱亜入欧」の反アジア主義と合体していく構造と云ってよい。

それに対して後者、すなわち中江兆民や幸徳秋水に端を発する梅屋や宮崎焔天らは、日中提携を重視しながら、大陸への軍事侵略に反対しアジア諸民族の独立と連携を希求し、第二次大戦後のバンドン会議につながる。田岡嶺雲、樽井藤吉から北一輝、中野正剛、尾崎秀実、三木清、さらには（戦後期に及ぶ）石橋湛山や田中角栄、大平正芳、福田赳夫らに至る系譜だ。

その二つの系譜のはざままで今、孫文や梅屋の思想と行動が、百年の時空を超えて現代のアジア主義とアジア像のありようを問い続けている。

4 日本の選択

改めて言うまでなく、孫文の思想と行動の持つ現代的意味は、孫文死の4カ月前、神戸での「大アジア主義」と題する講演の最後に日本国民に投げた、次の問いに集約される。「あなた方日本国民は、西方覇道の手先となるのか、東方王道の干城となるのか」。つまりは覇権主義的軍事外交の道を選択するのか、協調主義的平和外交の道を選ぶかの問いである。

しかもそれは、アジア文化に潜む「和と共生」の精神に立つのか否かの選択肢と重なりながら、中国革命の進展過程で生じた内外

二つの、下からの社会変革の動きをめぐる選択肢と重なり合った。すなわち下からの社会変革の動きを拒斥するのか、それと連携するかの選択肢である。軍事同盟外交による「閉ざされたアジア」なのか、平和協調外交による「開かれた大アジア」なのかの問いである。

言うまでもなく日本は、孫文が示唆した第二の道でなく、第一の道を選択した。孫文亡き後日本は、対支21箇条要求廃棄を拒否し続けて、中国との共生を拒斥し、ソ連を敵視し、欧米流の軍事同盟に依拠して領土拡大のテリトリーゲームへとますますのめり込み、大陸侵略へ繰り出していった。しかも、内なる市民社会化としての大正デモクラシーの動きを圧殺して大政翼賛会政治へと変貌した。その究極の形が、東条軍事情権下の大東亜共栄圏構想であり、その破綻と日本の敗戦だ。

他方、中国国民党もまた孫文亡き2年後、1927年蒋介石が、反革命クーデタによって南京政府を樹立し国共分裂して国民革命は敗北した。下からの社会変革の動きを拒斥し、国共合作を終焉させて、もうひとつのテリトリーゲームへと乗り出した。そして内戦に敗退して軍事独裁へ転化し、第二次大戦後、米ソ冷戦下で反共主義陣営の先兵と化していた。それは、かつて孫文が、ロシア革命と五四運動の展開下、連ソ、容共、扶助工農の三原則を軸に国共合作によって国内統一と東亜連帯の道へ踏み出したのと対極をなす。

そして日本の敗戦から半世紀、冷戦終結から20年後の今日、グローバル情報革命の進展の中で地域主義の第三の波がくり出され、東アジアの地域統合が、東アジア共同体構築のかたちをとって加速され始める。その動きが、孫文が生きた百年前と同じように今、二つのアジアの道を私たちに提示し、いずれのアジアを取るのか問いつけている。その問いが、東アジア共同体構築の現実の動きを加速させながら、東アジア共同体批判論をまた浮上させている。日本は「膨張する危険な」大陸アジアへの深入りを避け、日米韓軍事同盟こそ強化すべきだという、もうひとつのアジア論、いわば21世紀型「脱亜入欧」論である。それが、中国を中心とする「陸のアジア」の膨張に対処し対抗すべく、太平洋に広がる「海のアジア」と連携し、日米軍事同盟の深化をはかるべきだとする（渡辺利夫・拓殖大学長のいう）「新・海洋国家」論と重なり合う。いったいそれを私たちは、どう考えるべきなのか。

5 21世紀地域主義の第三の波へ

少なくとも私たちは今、地域主義の第三の波に直面している現実を直視しなくてはならない。その波は、19世紀産業革命下、テリトリーゲームが現出させた——スターリング・ブロックや大東亜共栄圏のような——勢力圏による垂直的地域主義ではない。20世紀工業革命下、通商生産ゲームが現出させた——EECやASEAN

のような——関税同盟を軸とする閉ざされた水平的地域主義でもない。その波は21世紀情報革命下、グローバル化が現出させたネットワーク型の重層的な地域主義の波だ。地球環境と開発との共生を求め、開かれた地域主義である。ヒトとモノ、資本や技術、文化や学芸が、国境を越えて人々を結び合わせる地域主義の第三の波だ。確かにグローバル情報革命は一方で、アングロアメリカ流のネオリベリズムによるカジノ金融資本主義の跳梁跋扈を生み出した。それが、社会経済基盤の脆弱な東アジアを襲い、地域社会のリスクを最大化し、そのリスクが、ドルと核とアグリ（農）によるグローバル覇権主義的な軍事同盟外交のつくる脅威と重なった。

グローバル情報革命は他方で、東アジアの発展を生み、市民社会を醸成し、生産と物流と環境保全の地域協力メカニズムの構築を要請し、地域内ウインウインの共通利益を強める。生産が一国内で完了せず、数力国にわたる「生産大工程の時代」が、それに拍車をかける。加えて情報革命の進展は、豊かな都市中間層を軸に東アジア共通の文化を台頭させ、儒教仏教文化の古層と共振しながら、アジア文化の興隆と再生を生み続けていく。

21世紀情報革命が地域主義の第三の波をつくり、東アジア地域協力の制度化、つまりは地域統合を求め続ける、新しい時代構造である。その時代構造が、ポスト・テリトリーゲーム下で新しいアジア主義を叢生させ、東アジア共同体の構築を求めて今、それを現実

化し始めている。かつて孫文が描き、梅屋が夢見た新しいアジアの国際秩序の具現化だ。

そこではもはや、かつて日本の大アジア主義者たちが志向した「大国・日本」が盟主ではない。中国のアジア主義者らが志向した中日主導でもないし、韓国のアジア主義者らが希求した日清朝連盟でもない。東北アジアの大国中心ではなく、むしろ東南アジアの弱小なASEAN諸国が、地域統合の中心に座り、ネットワーク型分業を軸に日中韓3大国を束ねて統合の推進者となっていく。辛亥革命以後百年の歴史が、アジアの解放を生んで成長と発展をつくり、軍事力ではなく、財と文化というソフトパワーを軸に、互に対等の立場に立つて地域協力の制度化を進めていく構図だ。

6 東アジア共同体への道

実際そこでは、もはやテリトリーゲーム下、軍事力を軸にした「遠交近攻」戦略——遠くの国と同盟し近くの国を攻撃する外交戦略——に依拠してはいない。21世紀「不戦の世紀」の到来が、ポスト・テリトリーゲームを時代の基軸に変えている。そしてその新しい時代の基軸が、財と文化、人と技術、資本と商品が自由に行き来しながら開発と共生の絆を強める、新しい地域統合のかたちを創生し続けている。だからそこでは外交が、ソフトパワーを軸にした「遠交近攻」戦略——遠くの国と交際しながら近くの国と協力協働し合

う外交戦略——に依拠しながら、近隣諸国との共生の制度化、つまりは地域統合を求め続ける。そしてAPECからASEMや上海協力機構に至る、いくつもの地域協力機構が、相互に交差し補完し合う「開かれた大アジア主義」を志向する。

財や技術、文化や芸術が、開発と共生を求め、国境を越えて人々を結び合わせる、東亜新秩序の道である。それを、孫文と梅屋の夢を超える第三の大アジア主義の道と叫びかえてもよい。その道が今、百年の時空を超えて、孫文や梅屋と共に、孫文のかつての言葉を伴って、東アジア共同体のかたちを借りながら、私たちの前に立ち現われている。「功利と強権による西方霸道の手先となるのか、仁義と道徳を求める東方王道の干城となるのか、それはあなた方自身が慎重にお選びになればよいのです」と。

「地域統合とは国と国とを同盟させるのではなく、人と人とを結び合わせることである」——欧州統合の父ジャン・モネの言葉が、孫文の言葉と重なり合って今、私たちに、新しいアジア秩序の構築を求め続けている。

註1、後年、南方が友人柳田国男宛て書簡の中での回想である（『南

方熊楠全集』第8巻196頁）。